

新型インフルエンザによるパンデミックシミュレーション

日数	感染状況(国内状況)	北斗市の状況
X-3	最初の感染者A発生(渡航先で感染)	
X	感染者Aの帰国(感染3日目) 移動中の航空機・空港・列車等で感染の拡大	
X+1	感染者A、通常出勤 移動中、職場での感染拡大	
X+2	感染者A、体調の異変に気づき受診	
X+3	地方衛生研究所および国立感染症研究所で、新型インフルエンザ(H5N1亜型)による感染と確認	
X+4	政府が国民に向け、新型インフルエンザの国内侵入を公表 この時点での感染者数は首都圏を中心に約1万人	入院数は首都圏で100人程度なので、社会的な影響はまだない。 マスコミ報道の結果、市役所に市民からの問い合わせがある。
X+5	京阪神で感染者を確認 想定されていたH5N1型の変異種であるため、プレパンデミックワクチンの効力に疑問があることが指摘される。	
X+10	道内(札幌周辺)に侵入する(確認はされない) 首都圏での感染が拡大し続ける	
X+15	中京圏・福岡・仙台・札幌でも感染の拡大が確認される 政府発表により、抗インフルエンザ薬の国内備蓄は8000万人分であり、投薬に優先順位があることが報道される。	プレパンデミックワクチンの事前接種や抗インフルエンザ薬についての問い合わせがある。
X+30	道央圏を中心に感染が拡大 北斗市内にも侵入する(確認はされない)	マスク等の感染予防用品の需要が急騰し店頭から消え始める。 発熱外来設置等の対応策がとられはじめる。
X+45	首都圏から京阪神にかけて社会機能が低下する 首都圏での抗インフルエンザウイルス薬の予防投薬 道南での感染者が複数確認される	欠勤率が徐々に増加し、経済活動に悪影響が出始める。 各学校での登校停止措置がとられる。罹患していない児童・生徒の待機中の問題行動が表面化し、教育委員会や各学校職員等が対応に追われる。 首都圏や道央圏での経済活動停滞のため、コンビニや大規模店舗等で雑誌や清涼飲料水、加工食品などの製品が欠乏し始める。
X+60	国内の感染者数がピーク(500万人)に達する 北斗市内にも感染者が発生している 自宅待機者多数により、電話の利用制限やインターネットの帯域制限が発生する	北斗市の欠勤率増加。上下水道課の職員1名が入院し、上水道がウイルスに汚染されているというデマが流れ、対応に追われる。 発熱外来の受診者が増加する。救急車の稼働率が上昇し、救急搬送の必要性についての判断を迫られ始める。 病院では受診者から抗インフルエンザ薬の処方を要求され、対応に追われる。
X+75		入院患者数が域内病院の収容能力の限界に近づき、症状によるトリアージが始まる。病院・渡島保健所・市役所に問い合わせや苦情が多数届き、職員のマンパワーが浪費され始める。自己防衛や過労による欠勤者が出始める。 パートや派遣労働者を中心に失職者が出始め、医療費についての問い合わせが増え始める。
X+90	道南および北斗市の感染者数がピーク(北斗市で最大6,000人)に達する	市役所職員の30%以上が欠勤。課によっては、半数以上が欠勤し機能不全に陥る。また、課長不在の課が発生し権限の所在について問題になる。 受診患者、入院患者の数が病院の処理能力を超える状況になり、廊下やホールに寝かされる入院患者が発生。 1日あたりの死者が10名に達して火葬場の処理能力を超えるため、火葬できない遺体の処理が問題になる。 警察の人員不足により治安維持能力が低下、放火やコンビニ強盗など犯罪発生の可能性が高まる。
X+105		独居老人宅やひとり親家庭で、死亡者や重篤患者が発見され、対応を迫られる。 茂辺地・当別地区では、運転できる家族の罹患により受診不能に陥る老人が多数発生する。 ゴミ収集車のドライバーが不足し収集が遅れる事態が発生する。生ゴミの処理遅れや放置の問題が発生する。
X+120	流行第1波が終息に向かっているという政府発表がある	クリーンおしまのゴミ集積用ピットが収容限界を超え、最終処分場への埋め立て処理が行われる。
X+180	パンデミックワクチンの供給開始	パンデミックによる営業停止や自粛、家畜の殺処分等で廃業に追い込まれた事業者に自殺者が出始める。